

兵庫県南部地震から一年

“開かれた教会”への挑戦

カトリック・神戸鷹取教会

神田裕司祭に聞く

－鷹取教会はいろいろな意味で注目を浴びている。ここが救援基地となったのはカトリック教会の方針ですか。

神田 初めから救援基地にと位置づけたわけではない。この教会もほとんどが焼け、残った建物の中の跡片づけから始まった。そうしているうちに行き先を探していた人が集まり始め、自然とモノも集まりだした。その集まり方は、いちおう宗教とは関係のないかたちです。

教会の建物は燃えてしまっても、いろんな人の救援活動の拠点として教会自体は続いている。それはあくまでも救援活動であって宗教活動ではないが、自分個人に関しては宗教者の活動と思っています。ただ、これも肩書としての「宗教者」ではなく、一個の人間としての宗教者というところが基盤になっている。

－ボランティア活動には宗教色を出さないようにしましたか？

神田 教会を拠点に動く人にも、教会の名前をあまり出さないように言ってきました。教会を正面に出すと他の宗教の人々が入りしにくいですからね。

地域に開かれた教会、というのは二十年来のスローガンでした。これは第二バチカン公会議の方針を前提としたものです。しかし、我々のまわりにはこれまでそれを具体化する現場がなかった。宗教施設はやはり未信徒にとって敷居が高いのですね。この敷居を取り除けて地域とどう関わってゆくか、教会が地域とどう“出逢う”か、これは大きなテーマだった。

その意味で鷹取教会はこれからの教会像を探る一つのトライアルになる。周辺教会も鷹取に注目しています。

震災後の二月、大阪大司教区は“新生計画”を打ち出した。震災で崩壊した教会を単に元に戻すのではなく、新しく生まれ変わらせよう、というものです。その中で、特に“谷間”に置かれている社会的弱者の心に生きる宗教を目指そうとしている。考えてみれば当たり前のことなんですが、教区挙げてのチャレンジです。

－ボランティア活動が呼び覚ましたものは、そこでどのように位置づけますか？

神田 ボランティアの支援活動はこれまで神戸以外の人に支えられてきた。それを今後、被災地の人々がどう受け継ぐかが問われる。同じことはこの教会にも言えます。教会を拠点に、ボランティアの人達がこの“地域”でおこなった活動を、被災地の我々や信徒が「どのように日常に引き継いでゆくか」が問題となるでしょう。

幸い、さっきも触れたように、“谷間”に置かれているひとの心に生きる、というカトリック本来の姿ははっきりと見えてきました。

－ボランティアへの取り組みという問題は既成仏教教団でも震災を契機にクローズアップされました。宗教者とボランティアについて、どう考えますか。

神田 前にも言いましたが、制服、肩書の宗教者ではなく、信仰心、宗教心を生きる、というレベルで考えてみたいですね。

救援活動に携わってきた人は属している宗派も区々だし、なかには信仰をもっていないと言明する人も少なからずいました。しかし、いずれも人間本来の優しさを根底にもっている。だからこそボランティアを続けてこられたと思います。そして、そうした優しさは我々の宗教が本来目指してきたものだったはず。これを広い意味で“宗教心”と見てもいいのではないですか。

宗教者のボランティア活動が必ずしも充分なものではなかったという批判は聞きます。仏陀やキリストの言葉は知っていても、いざそれを実行すると考え込んで何もできない。しかし、ボランティアの人達は考え込む前に行動してくれた。宗派、信仰の有無に拘わらず、その行動は人間本来の優しさが基盤になっていました。

私は、自分（の枠）を超えて他人と関わることに宗教心の根底がある、と思っています。自分の精神性を高めることを目指しても、それが他人との関わりの中かで行動として現われない限り、宗教としての意味はない。それなら宗教心を持たないと明言するボランティアの“勝ち”です。

社会、共同体を、「自分」を脱出しきれない「私」の集まりを超えて「私たち」のレベルまで高めてゆき、そのレベルで宗教心を探ってゆくことは私達の教会にとっても課題になると思います。

「人間本来の優しさで」と神田司祭【写真は省略】

内なる国際化を

独自のFM放送開局

－鷹取をみると、豪華な建物はなくても“教会”は立派に存在している……。

神田 ボランティアの活動拠点を行政は提供してくれない。ならば、宗教界が提供すればいい。結果として聖堂が建つのが四年や五年遅れてもいいのではないかと、思います。町のなかに教会がある。町づくりの視野の中かで教会の役割、その復興を考えてゆくべきでしょう。

実は十七日から、ここのコミュニティのFM放送局がこの教会の仮設プレハブに開局するんです。今回の震災で情報伝達が悪かった、という反省のうえに立って、外国人住民のため母国語で情報を伝える放送局で、地域のボランティアだけで運営します。

「国際都市神戸」というかけ声は大きいですが、実は何の実体もない。内なる国際化は皆無です。震災の際にも行政には定住外国人救済の配慮はありませんでした。このFM放送は“内なる国際化”へのささやかな試みですが、何年か経てば教会から離れ、地域センターに移るでしょう。そこで地域の夢の一つが実現してゆくことを期待します。

行政は四月頃からボランティアを閉め出す方向をとりはじめ、「復興」云々を言い出した。しかし、この辺りを見てもわかるとおり（復興は）何も実現していない。そのなかで、震災とその後のボランティア活動において私達が発見したものを、どう継承してゆくか。メンタリティーで持ち続けられればいい、という考えもあるでしょうが、やはり何か形としてもち続けたいといった思いもある。

その意味で、FM放送局は受け継がれてゆく“かたち”になるのではないかと期待しているのです。

教団の枠超え市民参加

河野厳道教務総長に聞く

黒住教

「誠の人を育てる」

本教は教祖神の御聖願達成を目指すとともに、御教えを実践するべく福祉、環境問題等に積極的に取り組んでいますが、昨年一月十七日に関西地方を襲った大震災においては「わたがし作戦五十日」と称する被災地・神戸での炊き出し奉仕を、一月二十三日から三月十四日までの五十一日間、教団という枠を超えて展開しました。

「わたがし作戦」といっても実際に綿菓子を作ったのではなく、教団が綿菓子の割り箸、つまり奉仕の軸となつて、そのまわりにふっくらと温かく膨らむ綿菓子のように奉仕の輪が広がることを願って名付けられた名称で、地元新聞等の報道もあって、教団関係以外の企業や団体、個人を含めた延べ三千人以上の人々に参加、奉仕して頂きました。

被災地・神戸では、青年連盟長を務める黒住宗道教嗣が指揮を執り、一泊二日ずつ交代で岡山から出向いたスタッフたちとともに兵庫中学校、鶴越小学校、夢野小学校、菊水小学校の四カ所に避難する約二千五百人の被災者に対する炊き出しを朝夕合計五千食ずつ五十一日間にわたって展開しました。

宗旨多様な被災者に対する配慮もあって黒住教ということは明かさず、「岡山市の市民ボランティアグループです」とだけ名乗って活動し、純粋な奉仕に徹することに努めました。

三月のおわりには、ご縁あって本教の招聘によりチベット仏教の最高指導者ダライ・ラマ十四世法王が来日されました。法王は、滞在期間中、ことあるごとに震災の犠牲者、被災者に対する祈りを捧げられ、宗晴教主、宗道教嗣と懇談されるなかで、「わたがし作戦五十日」を称えてくださるとともに、宗教の役割についても語られました。

日本での法王の案内役を務めていた宗道教嗣との会話の中でも「被災者の方々が一日も早く元の生活を取り戻されることを、心から祈ります。それにしても、五十日間もの炊き出し奉仕はよくなりましたね。黒住教の信者以外の人が多く参加して、“市民ボランティア”として活動されたのが何より素晴らしい。新聞で知りましたが、“救済”と言いながら、実は“宣伝（宣教）活動”をしていた宗教教団が結構あったらしいですね。苦しむ人を利用しようとする、とても宗教者のとるべき態度ではありません」と申されていました。

また、宗晴教主とは次のような話し合いもなされました。

宗晴教主 私たちは毎朝昇る朝日に顕現する大自然の生命の源を大御神と崇め、その分けみたま（分心）が備わっているのが人間という人間観を持っています、この分心、一般的に言いますと魂、これを養うことが人が生きるということだと思えますが。

ダライ・ラマ法王 なるほど、それが修行です。

教主 魂を養うためには宗教によっていろいろな修行があると思います。現地での炊き出し奉仕活動を見ていて分かりましたことは、奉仕を受けた被災地の方々もさることながら、ボランティアの人々がそれ以上に喜びの深いものを得ていることです。一人ひとりの魂を養う道はここにこそあると確信しました。

法王 まさに真実です。こういった慈愛、慈しみに基づいた行為は、差し上げたその方に喜びを与えるだけでなく、それを行なった者に実に大きな喜びを与えるものだと思います。それは非常に重要で、慈愛をもってつとめる行動、利他的な行為というのは、その行為を受けている人ではなくて、為している自身に大きな恩恵を与えるものであるわけです。このような行為は結局、人のためでなく真の自分のためにあるということです。こうした行為を行なう場合はどうしても人のために犠牲になっているというふうに思われがちですが、そうではなくて、本当の自

分のためになるのだということを人々に理解してもらうことが大切だと思います。

教主 同時に、宗教団体の問題ですが、こういう行為を宗教団体の長（教主、管長、会長等）のためにさせるようなところがままあります。それが宗教団体をして最も反宗教的なものにしていると思うのです。宗教団体を通じて人々の人生の喜びに奉仕するのならよいのですが、そのまごころが教主、教祖のためということで、そこでとどまっている場合が多く、これが問題です。確かにいろいろな宗教活動もお金がなくてはできません。だからといって個人に莫大なお金を寄付させるのはどうでしょうか。時には、バチが当たるとか地獄に落ちるとかいった恐怖心をあおる言動までとったりもします。こうしたことが、一般の良識ある人を、宗教嫌い、宗教不信にさせる大きな因となっています。大切なことは、信者の方々がそれぞれの生活の中で人様の喜びをわが喜びとする、まさに慈愛の人、私たちは誠の人と申しますが、こういう人を生み育てるのが宗教の使命であり責任であると思います。また、そこにこそ私たち宗教者の喜びもあるわけです。今日の日本には、宗教を求め信仰を持ちたい人がたくさんいますが、そここのところを間違えないように、どうぞ慈愛の心を大きく養う場が宗教であることを、日本にいらっしゃる間に法王様のお口から日本の若い人たちに伝えていただきたいと思います。

戦後五十年の昨年は教団にとっても、社会的にも大きな節目の年でした。大震災をはじめ、地下鉄サリン事件などのオウム騒動、さらに先年来の政治不安、不景気、金融不安等々思いもよらぬ出来事が続きました。

こうした大きな天災人災が相次ぎ社会不安の高まる今日、宗教法人法「改正」が大きな社会問題となり、「真の宗教とは」という問題意識が広く国民の間に広がりつつあります。一層、宗教者がそして宗教教団がいかにあるべきか、きびしく問われていくであります。